

福岡のありのままの姿と未来への独創性を、世界につなげていく都市を目指して欲しい。

—— Hiroyuki Arima+Urban Fourth 代表 建築家 有馬裕之氏



有馬 裕之(ありま ひろゆき)

京都工芸繊維大卒、1980年竹中工務店入社。1990年に有馬裕之+Urban Fourth を設立。様々なコンペに入賞し、国内外で受賞歴多数。全国各地の地域活性、まちづくりの委員を務める。

作品群は都市計画から建築、インテリア、グラフィックデザイン、プロダクトデザインなど様々な分野に及び、日本・海外でトータルプロデュースプログラムを展開している。

#### 日本が成長した明治維新时期からの100年

この25年は、私の福岡での歴史とほぼ重なります。23歳の時に福岡に来て30年が経ちました。その間、福岡を拠点にアクロス福岡をはじめ博多駅や西鉄福岡駅、また新宿高島屋など、福岡市や九州外のような様々なプロジェクトや海外のプロジェクトに関わってきました。

この25年を振り返る時、私は江戸時代まで遡って考える必要があると思います。江戸時代は家内制手工業で、労働と生産が一体化し、労働することで価値や利益を労働者が直接管理し操作できる時代でした。農林漁業もそうですが、商業も自ら物を売るという労働をし、それにより売上げを得、労働の対価となる利益が個人に直接関係する生産システムの時代だったのです。ですから、藩用窯のあった有田が好例ですが、都会ではない小さなまちにも職人の技が根付いていたのです。こうした労働と生産システムの一体化こそが、元々の日本の基礎をつくってきたのだと考えています。

しかし、その後、明治維新を経て、工場や生産現場が組織化され、労働は賃金により雇われる形になっていきました。その産業革命での一番大きな変化は、生産システムが大きく変わり、

大量生産になったことに他ならず、それはアメリカ型の効率的システムに進化し、労働は歯車の一部として活用されることになりました。

日本では、例えば富岡製糸場ができ、それまで生糸を家内制手工業で作っていたのが工場化され、職人や女工は雇用という関係で契約され、労働と生産システムが切り離され始めました。賃金を得ることで労働者は間接的に利益と関係するだけになり、資本家は大量生産されたものを売って得た対価と、支払う賃金の差によってより多くの利益を得るようになりました。効率的なシステムが完成し、一方では家内制手工業時代に培った正確さや真面目さも残っていてそれが素晴らしく融合したのです。こうした労働と生産システムとの関係の変化がうまく起動し、明治維新からの100年近くは日本がうまく成長してきた時代だと思います。つまり、安価で真面目で正確な労働力が効率的な生産システムに直結して世界を席卷したのです。

#### 新たな生産システムを構築出来なかった25年

明治以来の生産システムの革新により、日本は成長しましたが、25年ほど前からおかしくなってきました。それは、グローバル化の動き

に対し、日本の仕組みが適応できなくなってきた時代だとも言えると思います。

1980年頃以降、世界の様々な動きに日本も巻き込まれ、それに対応しながらも順応出来ませんでした。その結果、昔ながらの労働—それを「旧労働」と呼ぶとして—は国内から減少し、今では中国やベトナム等の発展途上国に移動しています。これは日本人の賃金が高い状況が日常化したこと、他国への技術流出が進んだこと、そして円高が進んだことにより、生産原価の安い国々に旧労働が必然的に移ったものです。技術流出はモノを技術移転によって作る場合の宿命で、日本企業も欧米の技術を真似して競争力のある製品を作った過去がありますので、避けられない動きです。その上、今、世界の企業がターゲットにしているボリュームゾーンは「価格が安ければそこそこの品質で十分だ」という消費行動を取ります。日本がいくら「これは少々高価だが、こんなに品質が素晴らしい」と言っても売れません。日本国内でも日用品は高い物を買わなくなってきました。こうした極端に安い物が売れる時代では、日本が圧倒的な技術的優位性を背景にしたところで、グローバル化したフォードイズムに対し太刀打ちできません。フォードイズムとはフォード式の大量生産・大量消費ですが、それが全世界を席卷している中、少し言い過ぎかもしれませんが、もう日本にはそうした面での勝ち目が無いのではないのでしょうか。

日本は明治以降約100年の繁栄を作った生産体制(=旧労働を基盤にして)に置き換わる新しいシステムを構築することができないままここまで来た、というのがこの25年間だったと私は思っています。過去に成功した日本的方法は終焉を迎えつつあるのです。

## 地方が衰退した25年

日本の地域経済は、1980年頃以降の経済の

グローバル化で、工場が海外移転したことでまず打撃を受けました。それに加え、農林水産業を中心とした地場産業の生産システムを壊滅させる産物が輸入されてきたことが、地方の衰退をより加速させたと思います。

GDPに占める外需比率が10%台であることから分かるように、今の日本は完全に内需型の国です。TPPのような市場開放で外需を増やしたとしても、外需型の生産要素を増やす抜本的なシステム体制を取らないかぎり、結局はより多くの内需が減少するだけという国の構造的な問題が、深く現存しています。しかも、食料自給率が4割を切っているほど日本の農業は十分開放されているのであって、そのような状況での急激で短絡的なTPPの推進には私は反対です。もちろん部分的に構造改革しなければならぬ仕組みはあると思いますが、今のやり方で構造改革をすればするほど、九州を含めた地方の地域住民の働く場と所得が急速に失われるような、大きな問題が起こるでしょう。

また、小泉政権時に「市町村合併を通じて地域の核を大きくすれば、魅力的な企業や国際的な企業も誘致できる」として大規模な市町村合併を進めましたが、これも大きな問題を起こしました。現実には、企業投資が活性化するどころか、限界集落の出現や地域人口の流出、雇用の喪失等の問題が起きたのです。

私は過去に自治省の過疎地対策事業の委員を務め、福岡を中心に過疎の市町村の課題に取り組み、星野村や玄海町のまちづくりにも携わりました。当時は、過疎のまちでも何か残すべきものがあつたのですが、それがこの数年で急速に失われていて、今ではほぼ壊滅的状況です。そして、結果的に今の日本は人口が都市に集中する一方、それ以外の地方ではどんどん人が消えている印象を受けます。

## 地域特有のユニークさを次世代につなごう

確かに、長い間補助金に依存し、自らで活性化することを忘れていた地域側に問題はあったので、基本的な構造改革は必要だったと思います。しかし、地域の問題に対して関係者、特に机上論者が細かく認識せず、ただ古い体制を壊そうということだけを当時言っていたように思えます。伝統や古い体制に穏便な目線を送らなければいけない段階になっているのに、単に「古いものは悪い、壊せばいい」というのは短絡的で暴力的なやり方です。

町や村やそれぞれの地方地域は、それぞれの歴史を経て、有名無名の様々な方々が汗や血を流し、長い時間をかけて熱意を込め、そこに住もうとしてきた愛情の賜物であって、そうした方々がつくり上げ特別にハーモナイズされたものが地域の個性なのです。そこには重要で壊すと元に戻らないものが数多くあります。改革するならば、それらの良さにも配慮しつつ進めるべきで、それを忘れ、ただボロボロに壊していくのでは意味を成しません。

今、地方地域こそは、全て同じではないこと／それぞれに微妙に変化していて、地域特有の自然や景観、歴史的遺産、伝説、伝統、文化、産業、あるいは教育、福祉といった、他には見られないユニークな特徴があること／そしてそれらに本格的にフォーカスを当てて次世代に繋いでいかなければならないこと…を強く再認識する段階にきています。

## 地域のユニークな伝統を産業化しよう

地域のユニークな伝統の例に、祭りがあります。福岡では博多祇園山笠が代表的ですが、私が思うに、山笠はあまり全員参加になっていないのではないのでしょうか。単純な祭りのままで終わらせず、産業化を考えることも今後は必要だと考えます。今までのフォーディズムが終わりかけている時代は、個性のある地域の祭りの

ようなイベントであっても、新しい産業の基盤として世界と結ぶことで成り立つ、次の段階の時代でもあります。

実は、数年前に「100年後の京都」をデザインする都市計画の国際コンペに参加し、その受賞者の一人に選ばれました。その際、私は京都のまち全体を改変する3つの提案をしました。

1つ目は庭の提案です。新しい「庭」を1,000個ほど街に埋め込もうというものです。京都観光では建物よりも庭園を見る機会が多いと思います。盆栽や植木が産業化できているので、大企業が自主的に庭園整備に投資をする代わりに、税制優遇で拠点を誘致する仕組みを導入し、また市民からは盆栽の寄付を受けるなど、市民や企業が参加し次世代に繋げる世界遺産都市としてさらに発展するための、環境型の観光資源育成システムの提案をしました。世界遺産を市民参加、企業参加によりさらに補強することで、そこに落とされる資金を全世界のネットワークで集め、都市整備に活用する提案です。

2つ目は祭りの提案です。京都には大小含め数多くの祭りがあります。それらは博多山笠と一緒に、同じルートしか通っていませんが、毎年ルートを変える提案をしました。祭りのルートが変われば、そのルート沿いの都市構造が活性し変わります。例えば、祇園祭は現在、河原町通と四条通周辺等を中心としていますが、それを数年毎に変えて他の通りにも適応し「来年はウチの番だ」と頑張るようにする。つまり地域の意欲を引き出すわけです。祭りと都市づくりを合体させて、まちをもっと流動的に活性化すべきという提案です。

3つ目は全世界の人々の墓を誘致する提案です。ピラミッドも仁徳天皇陵も高台寺も観光資源となるお墓です。過去の方々の墓だけでなく、未来の人々の墓も誘致し、全世界の人にとって京都が自分のメモリアルブレースとなるようにすれば、いろんな方が京都に関係するこ

とになります。しかも、墓は空調不要で省エネで電気代もあまりかかりません。宗教を問わず皆がインターネット上で京都にある墓とネットワークを結ぶシステムも可能です。

つまり、地域のユニークな伝統を産業と活力に繋げていくことは、どのまちでも大事だと私は考えています。

### 「新労働」を生み出すまちになろう

私は福岡出身ではなく、福岡市には改善しなければならない面もあると考えますが、基本的には大好きで、住み続けることを決めており、素晴らしい都市になる可能性が十分あると思っています。その上で、今後の福岡を考えると、これまでの25年間に顕在化した課題に対する解決策がない、という大きな問題があります。

つまり、先ほど旧労働の話をしました。新労働とは何かを考えなければならない段階が来ているのに、それに対するビジョンが見えません。労働の価値が変化する中で、新労働を行う場としての活性化された環境と、それに付随するファシリティが今後絶対必要になってくるでしょう。中国等の安価で量産する産業構造の国にはそれらがまだ必要ないので、日本でしかそれらはできないはずで

です。ですから、福岡の規模や豊かさをこのまま持続させ、それを次世代に連続させるのに今がまさに好機だと思います。それは、デジタル技術の進化が地域と世界を直接繋げ、人々の労働の仕方や時間の使い方を変える等、地域に全く新しい可能性をもたらしていることが大きくあります。そして、「認知資本主義」というユニークな概念が生まれて、その新資本主義の台頭がそれを後押し始めています。

従来、工場や商業施設は単純な労働の場で、そこにずっと張りついて売るとというのが、日本が成功した古い資本主義でした。しかし現代は時間、情報、知恵、アイデア、価値、生きがい

等も十分に産業化できる時代に入ってきました。Googleのように、社是に「利益を目標としない」と掲げ、社員に自らの考えを明確に表現させ、その中から一般化できるものにスポンサーをつけて収益を上げていく、そのようなモデルを構築した企業が成功する時代なのです。

こうした認知資本主義の下では、対象となる国、エリア、都市の規模は全く関係無く、また組織の大小も不問です。スタッフの生きがい、地域の面白さ、あるいは個性的なアイデアが、新しい資本主義として世界的に台頭する。日本もそれに巻き込まれる段階が訪れています。中央志向ではなく、各地域が自らを鍛え、新しい価値観を生み出すという流れにあるのです。

クリストファー＝アレグザンダーというUCLAの教授がいますが、彼は「都市はツリー構造ではなく、ラチス構造やリゾーム、要するに根のように縦横に張り巡らされた構造だ」と30年ほど前に主張していました。そうした都市構造が今、インターネットのネットワークを中心に現実化し、世界各地で先進国後進国に関わらず既に急速に進行しています。福岡でも、新資本主義を基準とするそうした状況がこれからリアルに存在し始めると思っています。

### まちの個性を市全体で創りだそう

福岡の都市としての規模は、自然と都市部が非常に近接し、素晴らしい環境となる可能性が高く、デジタル化の中でさらに進化する可能性があります。しかし、それを支える都市の魅力や新産業がどのように発展していくのかが見えません。福岡は支店経済、通過点都市と言われて久しく、どのような産業構造が可能なのかを明確に論議することができていません。行政や地場産業の怠慢だと思いますが、むしろ中国などの新興国の都市で、このような議論は進んでおり、福岡は遅れ始めているのです。

人口約130万人のミラノや約75万人のサン



フランススコなどの都市は、それぞれがユニークな政策、方法論で世界に対して強い情報を発信しています。ですから、その程度の人口規模でも世界都市になっています。メガポリスでなくとも、きちんとした構想のプログラムがあり、そこに住む人々が高いプライドを持って、積極的にそれを進化させようとしています。

一方で福岡は、国内に対してはアピールしているように見えますが、世界における個性やイメージが非常に弱いですね。例えば、シアトルは小さい都市ですが、シアトルカフェが象徴するアメニティ感があり、また、伝統や文化を大切にするだけでなく、それらが持つ雰囲気やオリジナリティを世界に発信しています。

福岡も、個性をさらに振興させていく取り組みを今こそ始めなければいけない、と私は思います。福岡の魅力の将来を考えれば考えるほど、様々な苦難を乗り越えてきた先人、彼らがここに住もうと思った意思や、困難を乗り越えてきた努力に思いを馳せる時が今だと思うのです。ここ福岡は、そのような中で選ばれた土地のほずですから。

伝統は、ただ保存していくだけでは劣化し廃れていきます。先程話した京都の都市計画の国際コンペでも、ただ「昔からあるから」だけでは存在意義が無くなってきているのでは？、ということをおは訴えたかったのです。こうした都市全体のイメージやオリジナリティを作る動きは、行政だけでは無理で、民意を高めて今後の流れを作らなければなりません。まずは、ステレオタイプで見飽きた欧米化等から卒業することから始めてはどうでしょうか。

### 地域独自の面白さを世界に直接つなげよう

話は江戸時代に戻りますが、当時の日本は鎖国をしながらも素晴らしい文化をつくり上げていました。それは、地域が藩の単位で地域自治を行い、個別の個性が各エリアに複合的に存

在し、繁栄していたのだと思います。

今盛んに議論されている道州制のような、政治的な単なる枠組みの議論では意味がありません。大合併したほとんどの基礎自治体は、周辺部の地域経済や地域社会で既に崩壊が始まっていることを認識すべきで、むしろ、地域の中小企業、個人、住み続けようと思う人々、そうした人々が地域づくりに果たす役割を明らかにした上で、地域再生を個性的に行わなければなりません。

ある村に工場を誘致すれば、村民一人あたりの年収は瞬間的には上がるかもしれませんが、それにより村落の形式が壊れ、文化も失われていきます。一部の多国籍企業、大企業やその本社が集中する大都市、都市部だけを優遇する従来の改革手法ではなく、それぞれの地域で、安心や安全、経済が基本的に成り立つ、安定的な地域づくりが必要ではないかと思えます。

そこで今、私がしようとしているのは、地域を直接世界に繋げるという活動です。グローバル化は大企業のためにあるのではなく、デジタルを利用しながら、地域や、その地域を大切に作る中小企業や人々のために推進されなければなりません。様々なプロジェクトを通じて、新しい地域・企業プログラムの活性化を図るべき時期に来ています。

そのためには、具体的なまちのイメージなど、地域独自の面白さ、楽しさをつくるのが重要です。メダカでもホテルでもいいのですが、ただ見せるだけで終わらず、地域全員の仕事にしていくための知恵を絞らなければなりません。私は今、モンゴルで伝統を活かし文化を活性化しつつ最先端の視線レベルで個性化して世界に繋ごうと「モンゴル、ここから世界に」という内容の講演を続けていますが、そこでは、モンゴルのありのままの姿と個性や独創性を、世界に繋げようという話をしています。

これは、日本、特に福岡でも同じことが言え

るのではないかと思います。いかに地域にもっとフォーカスを当てて掘り起こしていくか。それを経済という視点だけではなくやっけていく強い意志を、行政と民間が補完し合い世界をリードしていくことだと思います。

いかに自分たちを個性化し、自分たちのことを考えて世界につなぐかが、これからの時代では重要になってくると私は考えています。

### 多様なプロジェクトを起こしていこう

最近、新宮町で「8008」というプロジェクトを進めており、少しずつ完成し始めています。一般的には使用し難い広大な雑草だらけの斜面の敷地が8区画あり、そのままでは魅力的な価値を生み難いため、各区画の建物周辺に1,000本の苗木と1本の成長した木を植え、魅力的な森環境を生み出してマイナス要素の斜面を積極的に環境型の住宅地に変えようというものです。1区画に1,001本、8区画で8,008本の森ができます。傾斜地のため、建物を建てようと無理な造成をすると費用がかさみ環境が破壊されます。そこで、無理な造成をやめて森を育成し、その土地力を強化しつつ自然と共存する提案です。驚くほどローコストですが、世界のメディアにも紹介されつつあり、こうした小さな取り組みでも、世界に繋がることは十分できると実感しています。小さなことでも個性とはそういうことだと理解してもらいたいし、大きなプロジェクトではさらに様々なチャレンジが可能なはずです。

大規模なことや小さなこと、それぞれの個性を生かすような仕組みづくりということも含めて、色々なことができるのがこれからの面白さではないかと思います。

先程お話したように、モンゴルで最先端志向のプロジェクトに取り組んでいますが、そこでは具体的には、古くからある「ゲル」という仮想的な構造物によって国が13世紀に素晴らしい

く発展した歴史があり、その過去の素晴らしい経験に焦点を当て、今の時代を織り込みながらモデル的な都市づくりにチャレンジしています。また、20年間プロデュースしている山口県・川棚温泉のホテルでも、古い建物の中に、意識的に新しいエレメントを入れるようにしています。古さを保存するだけのまちは生き残れませんから、新しいもの、ファジーなもの、伝統や歴史、それと先端性を合体させたもの、色んなものがあって多様性のある個性環境を創ろうとしています。若者や老人が共存するのです。

それを私は「パラレル・リアリティ」と呼びますが、それぞれの人、老人や若者、子供にはそれぞれ個別の現実があり、それぞれが好きなものがあり、それらを否定することができないのがまちではないかと思うのです。単なるステレオタイプなプログラムをやっているのはデッドエンドの状況になるので、様々なものが連携するハブ型のネットワークプログラムみたいなものを意識していく必要があるでしょう。

私は、福岡発信でこのような場を個性的に創っていきたいと思っているのですが、それにはまず行政と民間が理念を共有し、意識的なプロジェクトをどう起こしていくのかが重要で、バラバラに行なうべきではありません。民間ばかりが先行すると利益中心主義になりますし、単純な利益中心主義は既に時代遅れです。また、行政も昔ながらの「文化」「ふれあい」等の紋切り型で一方向なことを言うだけでは、ゆるキャラに代表される極めて無駄に矮小化されたもの程度にしか成り得ず、それでは都市は全く活性しません。発想を変え、新しい流れで双方をうまく合体させるようなことができるといいでしょう。「福岡、ここから世界に」…新しいネットワークを広げる段階に来ているのが今だと思っています。

インタビュー日:2011/8/19 文責:URC 天野